

間口 A 洞窟の脊椎動物遺体
-横須賀市自然・人文博物館所蔵資料に関する報告-

宇根宏紀, 劔持輝久, 佐藤孝雄

Vertebrate remains excavated from the Makuchi A cave:
Report on materials held by the Yokosuka City Museum

UNE Hiroki¹, KENMOTSU Teruhisa², SATO Takao³

Makuchi A cave is a sea cave that is located at the east tip of the Miura Peninsula, Japan. In the past five excavations, faunal remains of the Yayoi period and Medieval times have been unearthed from the cave. Vertebrate remains from the cave are currently distributed and stored in four museums: National Museum of Japanese History, Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History, Yokosuka City Museum and Dr. Naotada Akaboshi Cultural Heritage Museum. In this paper, we will report on vertebrate remains of the Yokosuka city museum.

We identified the remains by comparing them with extant skeletal specimens that belong to the Department of Archaeology and Ethnology, Keio University. As a result, we identified 4 species of marine fish (red sea bream, sea bass, wrasse, and bonito), 2 species of birds (cormorant and diver), 9 species of terrestrial mammals (human, hare, dog, fox, racoon dog, weasel, wild boar and deer).

Considering the ecology of the identified fish and bird taxa, the faunal remains excavated from the cave can be considered to have come from fishing and hunting activities that lasted almost a year.

-
1. 慶應義塾大学大学院文学研究科 Graduate School of Letters, Keio University
 2. 赤星直忠博士文化財資料館 Doctor Naotada Akaboshi Cultural Heritage Museum
 3. 慶應義塾大学文学部 Faculty of Letters, Keio University
 4. 原稿受付 2024年1月14日 横須賀市 博物館業績 第784号

Key Words: Yayoi period, Miura Peninsula, sea cave, vertebrate remains
キーワード: 弥生時代, 三浦半島, 海蝕洞窟, 脊椎動物遺体

はじめに

間口 A 洞窟は、神奈川県三浦市南下浦町松輪字間口に東向きに開口する海蝕洞窟である(図 1)。標高 5.5m に位置し、幅 4m、高さ 6m、奥行 10~18m(埋没部を含む)を測る当洞窟は、1949・50 年に赤星直忠率いる横須賀考古学会、1971-73 年に神奈川県立博物館(現在の神奈川県立歴史博物館)によって発掘調査が行われ、国内初例となるト骨(弥生時代後期)・ト甲(古墳時代後期)が発見されたことでも知られている(赤星 1953, 神澤 1973)。

もっとも、学史的にも重要な本洞窟の出土動物遺体は、現在、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館、国立歴史民俗博物館、神奈川県立歴史博物館に分散・収蔵されており、未だその総体が十分に把握されていると言い難い。そこで、筆者らは、上記 4 館が所蔵する間口 A 洞窟の出土脊椎動物遺体を悉皆調査し、その内容と特徴を明らかにする作業に着手した。小稿では、その成果の一部となる、横須賀市自然・人文博物館が所蔵する脊椎動物遺体について報告する。

1. 資料と方法

横須賀市自然・人文博物館が所蔵する間口 A 洞窟の出土脊椎動物遺体は総計 80 点を数える。いずれも 1949・50 年の横須賀考古学会の発掘調査の際、肉眼で発見・採集された資料であり、赤星(1953)の調査報告によれば、弥生時代から中世に帰属する遺体とみられる。それらの中には「また洞」及び「又」と注記されている資料も含まれていたが、同じテンバコ中に収納されており、間口 A 洞窟出土資料であることがほぼ確実とみられるため、報告対象に加えた。

慶應義塾大学民族学考古学研究室が所蔵する現生骨格標本と照らしつつ、同定作業を進めた結果、それらには魚類 4 群、鳥類 2 群、哺乳類 9 群からなる資料が含まれていることを確認するに至った。表 1 には、各分類群の同定資料数(NISP)と、性別・年齢、サイズを考慮して算出した最小個体数(MNI)を示した。また、表 2~5 には、個々の資料

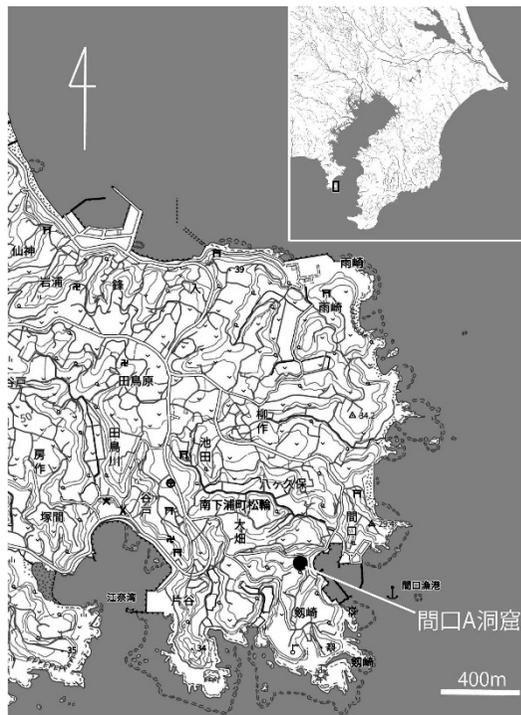


図 1 間口 A 洞窟の位置
地理院地図 Vector を利用

表1 分類群ごとの同定資料数(NISP)と最小個体数(MNI)

分類群		NISP	MNI
硬骨魚綱 Osteichthyes	マダイ <i>Pagrus major</i>	5	2
	ベラ科 Labridae	2	2
	スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	1	1
	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>	3	2
鳥綱 Aves	アビ属 <i>Gavia</i> sp.	1	1
	ウ属 <i>Phalacrocoracidae</i> sp.	4	2
哺乳綱 Mammalia	ヒト <i>Homo sapiens</i>	3	1
	ノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>	2	1
	イヌ <i>Canis lupus familiaris</i>	31	2
	キツネ <i>Vulpes vulpes</i>	5	2
	タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>	1	1
	イタチ <i>Mustela itatsi</i>	1	1
	イノシシ <i>Sus scrofa</i>	1	1
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	5	1

について同定結果や観察所見、計測値を記した。各計測値は、小数点第2位まで測定可能なデジタルノギスを用い原則3回測定した値の平均値に当たる。魚類と鳥獣類の計測箇所はそれぞれ堤ほか(1982)と Driesch(1976)に準じた。ただし、後者のうち歯牙を除くイヌの頭蓋骨と下顎骨については、茂原(1986)の設定箇所を計測した。以下、同定し得た動物群ごとに出土部位と観察所見の概要を記す。

2. 同定した分類群とその特徴

(1)硬骨魚綱

総計11点の資料が採集されており、マダイ、ベラ科、スズキ、カツオの遺体が含まれていることを確認した。

a. マダイ

右主上顎骨2点、右前上顎骨、左角骨、上後頭骨各1点からなる計5点を同定した。いずれも成魚に由来する資料であり、うち左角骨は全長67cmの現生骨格標本とほぼ同程度の大きさであった。主上顎骨と前上顎骨については、それぞれ計測値を堤ほか(1982)の推定式に代入し、体長復元を試みた。その結果、それぞれ、体長72cm、52cm、41cmほどの個体に由来する資料であることが明らかとなった。

b. ベラ科

コブダイなど大型種に由来する下咽頭歯2点を同定した。いずれも完形もしくはほぼ完形を保っている。

表2 魚類遺体の内容

分類群	部位	左右	数量	計測値	備考	注記
マダイ	主上顎骨	R	1	主上顎骨高: 12.6mm, 主上顎骨長: 66.5mm	完存	- 27
	主上顎骨	R	1	主上顎骨高: 11.1mm, 主上顎骨長: 48.7mm	完存	- 28
	前上顎骨	R	1	前上顎骨高: 9.2mm, 前上顎骨長: 35.9mm	ほぼ完存	-29
	角骨	L	1		ほぼ完存, 全長67cm標本とほぼ同大	-30
	上後頭骨		1		ほぼ完存, 体長51cm標本とほぼ同大	-127
ベラ科	下咽頭歯		1	横幅: 約9cm	完存, 体長35cmシロクラベラ標本よりかなり大	No45
	下咽頭歯		1	横幅: 約6cm	ほぼ完存, No45より小, 体長35cmシロクラベラ標本よりかなり大	No46
スズキ	歯骨	L	1	歯骨高: 7.7mm, 歯骨長: 45.8mm	完存	-194
カツオ	主鰓蓋骨	L	2		完存, 体長45.5cm標本とほぼ同大	-40
	主鰓蓋骨	L	1		関節部欠損	-41

c. スズキ

完形を保つ左歯骨 1 点を同定した。連合高は 7.7mm を測り、体長 30cm を越す成魚に由来する。

d. カツオ

左主鰓蓋骨 3 点を同定した。いずれも成魚に由来する資料とみてよく、うち完形を保つ 2 点は体長 45cm のカツオの骨格標本とほぼ同程度の大きさであった。

(2)鳥綱

鳥類遺体は計 5 点採集されており、うち 1 点がアビ属、余す 4 点がウ属の資料であった。

a. アビ属

右足根中足骨 1 点を同定した。ほぼ完形を保つ資料で、比較に用いたアビ及びシロエリオオハムの現生標本よりやや大きく、ハシジロアビの資料かもしれない。

b. ウ属

遠位部を欠く右橈骨及び右尺骨とほぼ完形を保つ左右の足根中足骨各 1 点を同定した。左右の足根中足骨はおそらく同一個体に由来する一対の資料とみてよい。いずれの資料も比較に用いたカワウとウミウの現生標本よりかなり小さく、ヒメウの骨である可能性が高い。橈骨と尺骨にはトビ、左右足根中足骨にはノスリと注記が付されているが、誤同定であろう。

表3 鳥類遺体の内容

分類群	部位	左右	数量	計測値	備考	注記
アビ属	足根中足骨	R	1	最大長(GL): 78.5mm, 近位端最大幅(Bp): 13.7mm, 最小骨幹幅(Sc): 4.6mm, 遠位端最大幅(Bd): 10.1mm	第3中足滑車欠損	-66
ウ属	尺骨	R	1	近位端関節面最大幅(Dip): 12.6mm, 近位端最大幅(Bp): 10.3mm, 最小骨幹幅(Sc): 6.03mm	遠位部欠損	-200
	橈骨	R	1		遠位部欠損	-201
	足根中足骨	R	1	最大長(GL): 52.13mm, 近位端最大幅(Bp): 10.4mm, 最小骨幹幅(Sc): 5.5mm, 遠位端最大幅(Bd): 13.0mm	ほぼ完存	-60
	足根中足骨	L	1	最大長(GL): 50.2mm, 近位端最大幅(Bp): 11.5mm, 最小骨幹幅(Sc): 5.7mm, 遠位端最大幅(Bd): 12.6mm	完存	-65

(3)哺乳綱

哺乳類遺体についてはヒト、ノウサギ、イヌ、キツネ、タヌキ、イタチからなる総計64点の資料が採集されていた。

a. ヒト

左下顎骨と左第1肋骨、右第3中足骨を各1点同定した。下顎骨については下顎角及び第2・3後臼歯の歯槽部を留めるのみであったが、あまり年を経っていない成人の可能性がある。他2点の資料は完形を保ち、いずれも骨端が癒合していた。本洞窟からは1971・72年の調査時に古墳時代前期ないし中期の成人2体、若年1体、弥生時代後期の未成年1体、同中期或いは後期の成人・幼児各1体からなる埋葬人骨群が出土している(佐宗 2022)。上記人骨3点も元来は埋葬個体に由来するものかもしれない。

b. ノウサギ

左寛骨と左大腿骨を各1点同定した。寛骨については恥骨を欠く。大腿骨は近位部のみが残存し、骨髓が利用されたのであろうか、骨幹が螺旋状に割れていた。

c. イヌ

計31点の資料を同定した。うち成犬に由来する資料は頭蓋骨ほか7点を数えるのみであった。ほぼ完形を保つ同資料は、頭蓋全長170.6mmを測り、中型犬に由来するとみられる。山内(1958)のⅢ式を用い、同計測値から推定された体高は45.7cmと見積もられた。額段が目立たず、前頭骨から鼻骨にかけての側面観が縄文犬にも似て直線的だ

表4 イヌを除く哺乳類遺体の内容

分類群	部位	左右	数量	計測値	備考	注記
ヒト	下顎骨	L	1		第2・3歯槽及び下顎枝残存	No.30
	第1肋骨	L	1		完存	No.33
	第3中足骨	R	1		完存	No.31
ノウサギ	寛骨	L	1	寛骨白長(LA): 10.2mm	恥骨欠損	-108
	大腿骨	L	1	近位部最大幅(Bp): 21.7mm	近位部残存	-107
キツネ	上腕骨	L	1	側面最大長(GLI): 110.4mm, 骨頭からの最大長(GLC): 108.6mm, 近位端最大幅(Bp): 16.1mm, 遠位端最大幅(Dp): 21.9mm	ほぼ完存, 後面近位部と右側面近位部にカットマークあり	No.27
	寛骨	LR	1	L 最大長(GL): 78.0mm, 寛骨白長(LA): 13.8mm, R 最大長(GL): 74.5mm, 寛骨白長(LA): 13.5mm, 恥骨結節長(LS): 23.9mm, 閉鎖孔長(Lfo): 19.3mm	左右連合?	-93
	寛骨	LR	1	L 最大長(GL): 82.1mm, 寛骨白長(LA): 13.0mm, 恥骨結節長(LS): 26.7mm, 閉鎖孔長(Lfo): 17.8mm, R 最大長(GL): 81.8mm, 寛骨白長(LA): 13.9mm, 恥骨結節長(LS): 26.7mm, 閉鎖孔長(Lfo): 17.8mm	左右連合	-94
	大腿骨	L	1	最大長(GL): 115.6mm, 大腿骨骨頭からの最大長(GLC): 116.2mm, 近位端最大幅(Bp): 23.4mm, 最小骨幹幅(SD): 8.2mm, 遠位端最大幅(Bd): 19.9mm	完存	-146
	肋骨	R	1		ほぼ完存	No.25
タヌキ	橈骨	L	1	最大長(GL): 73.9mm, 近位端最大幅(Bp): 8.8mm, 最小骨幹幅(SD): 5.7mm, 遠位端最大幅(Bd): 11.6mm	完存	-144
イヌ科	肋骨	R	1		完存, キツネorタヌキ	-95
イタチ	脛骨	R	1	最大長(GL): 47.6mm, 外側面長(LI): 46.1mm, 近位端最大幅(Bd): 7.9mm, 遠位端最大幅(Bd): 6.1mm	完存	-111
イノシシ	上腕骨	L	1	最大滑車幅(BT): 29.6mm	遠位部残存, 背側面の骨端線わずかに残る	-141
シカ	胸椎		1		棘突起欠損, 切断面あり, 椎頭・椎窩未癒合, 椎頭端も残存	No.28
	胸椎		1		ほぼ完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.29
	肋骨	R	1		ほぼ完存, 骨折治癒痕あり	
	肋骨	L?	1		近位部欠損	No.26
中型陸獣	肋骨	?	1		骨幹部残存	
	肋骨	R?	5		完存	No.23
大型陸獣	肋骨	L?	6		完存	No.24
	不明	?	2		破片	No.34
不明	破片		1			No.32

註: 計測部位はDriesch(1976)に拠る

が、第3前臼歯歯槽近心部に舌側への捻転が確認された。左右の上顎骨には第1・2後臼歯が植立するばかりであったが、他の歯種についても歯槽が保たれており生前にいずれかの歯牙を喪失した痕跡も認められない。後眼窩突起から発する側頭稜がブレグマ付近で交わり外矢状稜も発達している点からすれば、本頭蓋骨は雄犬の資料である可能性が高い。

他方、主体を占めた幼犬の資料には、右下顎骨に加え椎骨・四肢骨を確認することができた。下顎骨は、未だ顎体に第2・3乳臼歯が植立し、第1後臼歯歯槽の第1咬頭のみ萌出した段階にあることから、生後4ヶ月前後の個体に由来すると思われる(cf. 森1930)。同定した椎骨・四肢骨の多くも上記下顎骨と同一個体に由来する資料であろう。四肢骨についてはいずれも近・遠位端が未癒合の資料、椎骨に関しても15点中6点までが椎頭・椎窩端が未癒合の資料であった。また、四肢骨の骨幹部はいずれも完形を保っており、骨髄が利用された様子も窺えなかった。

d. キツネ

完形を保つ左上腕骨、左大腿骨、右肋骨各1点と寛骨2点を同定した。上腕骨と大腿骨はいずれも両骨端の癒合が完了しており、寛骨2点のうち1点についても左右が癒合

表5 イヌ遺体の内容

部位	左右	数量	年齢	計測値	備考	注記
頭蓋骨		1	成	頭蓋最大長: 170.6mm, 脳頭蓋長: 88.4mm, 頭蓋幅: 55.4mm, バジオン・プレグマ高: 68.4mm, 最小前頭幅: 29.1mm, 前頭骨頬骨突起端幅: 46.6mm, 後頭三角幅: 65.7mm, 最小眼窩間幅: 31.1mm, 顔長: 85.2mm, 吻長: 70.7mm, 吻幅: 37.2mm, 硬口蓋最大幅: 56.4mm 左第4前臼歯長(L): 14.9mm, 左第4前臼歯最大幅(GB): 7.1mm, 左第4前臼歯幅(B): 6.0mm, 左第1後臼歯長(L): 10.6mm, 左第1後臼歯幅(B): 11.0mm, 左第2後臼歯長(L): 5.4mm, 左第2後臼歯幅(B): 7.1mm 右第4前臼歯長(L): 15.5mm, 右第4前臼歯最大幅(GB): 7.6mm, 右第4前臼歯幅(B): 6.4mm, 右第1後臼歯長(L): 10.2mm, 右第1後臼歯幅(B): 11.4mm, 右第2後臼歯長(L): 5.6mm, 右第2後臼歯幅(B): 7.3mm	ほぼ完存, L(×××××××××× P4,M1,M2)・R(×××××P4M1M2)	No.1
鼻骨	LR	2	成	下顎骨全長(1): 106.8mm, 下顎骨全長(2): 109.0mm, 下顎枝高: 39.2mm, 下顎枝幅: 27.1mm, 下顎体高(1): 22.2mm, 下顎体高(2): 18.1mm, 下顎体高(3): 20.6mm, 下顎体厚: 11.0mm, 咬筋窩深: 5.0mm	No.1と接合, 左右一対	No.35
下顎骨	R	1	幼	肩甲棘に沿う高さ(HS): 83.0mm, 肩甲頸最小幅(SLC): 21.7mm, 関節突起最大幅(GLP): 24.5mm	完存, (xxxxxm2m3X), M1萌出途中, I2・C・M2・M3未萌出	No.2
肩甲骨	L	1	幼	近位端最大幅(Bp): 22.3mm, 遠位端最大幅(Bd): 25.5mm	完存, 遠位端未癒合	No.3
上腕骨	R	1	幼	近位端最大幅(Bp): 19.1mm, 遠位端最大幅(Bd): 25.2mm	完存, 近・遠位端未癒合, 骨頭あり	No.4
上腕骨	L	1	幼	最小骨幹幅(SD): 9.9mm	完存, 近・遠位端未癒合	No.5
橈骨	R	1	幼	最小骨幹幅(SD): 10.3mm	完存, 近・遠位端未癒合	No.6
橈骨	L	1	幼	最小肘頭幅(SDO): 18.4mm, DPA: 22.0mm	完存, 近・遠位端未癒合	No.7
尺骨	R	1	幼	最小肘頭幅(SDO): 18.4mm, DPA: 21.9mm	完存, 近・遠位端未癒合	No.8
尺骨	L	1	幼	最大横幅: 60.4mm, 最大長: 30.2mm	完存, 遠位端未癒合	No.9
中手骨?	?	1	幼		完存	No.22
環椎		1	幼	頭方最大幅(Bpacr): 24.5mm, 尾方最大幅(Bpacd): 26.6mm, 最大縦幅(GLPa): 25.0mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	-143
頸椎		1	幼	頭方最大幅(Bpacr): 26.9mm, 尾方最大幅(Bpacd): 27.6mm, 最大縦幅(GLPa): 24.5mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.13
頸椎		1	幼	頭方最大幅(Bpacr): 27.2mm, 尾方最大幅(Bpacd): 26.7mm, 最大縦幅(GLPa): 21.9mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.14
頸椎		1	幼	頭方最大幅(Bpacr): 26.5mm, 尾方最大幅(Bpacd): 27.1mm, 最大縦幅(GLPa): 20.1mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.15
頸椎		1	幼	頭方最大幅(Bpacr): 27.1mm, 尾方最大幅(Bpacd): 24.0mm, 最大縦幅(GLPa): 19.8mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.16
頸椎(第7?)		1	幼	最大高(H): 43.2mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.17
胸椎		1	幼		ほぼ完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.18
胸椎		1	幼		椎体を欠く	No.18
胸椎		1	幼		椎体を欠く	No.18
胸椎(後部)		1	成	最大高(H): 36.6mm	ほぼ完存, 椎頭・椎窩癒合	No.19
胸椎(後部)		1	成	最大高(H): 33.8mm	ほぼ完存, 椎頭・椎窩癒合	No.19
腰椎		1	成	最大高(H): 32.8mm, 頭方椎体最大横幅(BFcr): 20.2mm, 頭方椎体最大縦幅(HFcr): 11.9mm	完存, 椎頭・椎窩癒合	No.20
腰椎		1	成	最大高(H): 40.9mm, 頭方椎体最大横幅(BFcr): 18.2mm, 頭方椎体最大縦幅(HFcr): 12.9mm, 頭方最大横幅(BPtr): 44.4mm	完存, 椎頭・椎窩癒合	No.21
腰椎		1	成	椎体長(PL): 25.1mm, 最大高(H): 45.3mm	ほぼ完存, 椎頭・椎窩癒合	-147
腰椎		1	成	椎体長: 23.5mm, 最大高(H): 45.0mm	ほぼ完存, 椎頭・椎窩癒合	-147
寛骨	L	1	幼	最大長(GL): 104.3mm, 寛骨白長(LA): 21.7mm, 恥骨結節長(LS): 29.9mm, 最小腸骨幅(SHSC): 16.4mm, 閉鎖孔長(Lfo): 21.1mm	完存	No.10
大腿骨	L	1	幼	遠位端最大幅(Bd): 19.4mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.12
脛骨	R	1	幼	近位端最大幅(Bp): 25.3mm, 遠位端最大幅(Bd): 18.1mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	No.11
脛骨	L	1	幼	近位端最大幅(Bp): 24.1mm, 最小骨幹幅(SD): 11.2mm, 遠位端最大幅(Bd): 17.8mm	完存, 椎頭・椎窩未癒合	-145

註: 計測部位はDriesch(1976)に拠る

した状態にあったことから、いずれも成獣の資料とみてよい。上腕骨の後面近位部と右側面近位部にはカットマークも観察することができた。大腿骨にはイヌと注記されているが、骨格標本と照合した結果、キツネと同定した。

e. タヌキ

完形を保つ左橈骨 1 点を同定した。両骨端が癒合しているため、成獣の資料とみられるが、現生標本と比較するとサイズが小さい。

e. イタチ

完形を保つ右脛骨 1 点を同定した。両骨端が癒合しており、成獣の資料とみられる。注記にはキテンと記されているが誤同定であろう。

f. イノシシ

左上腕骨の遠位部 1 点を同定した。遠位端の癒合は既に完了しているが、背面側にわずかに骨端線を認めることができた。骨幹に螺旋状の割れ口が認められることから、骨髓が利用された様子が窺われる。

g. シカ

胸椎 2 点と肋骨 3 点を同定した。胸椎 2 点は椎頭椎窩が癒合していなかった。肋骨は 3 点認められ、うち 1 点はほぼ完形を保ち、骨折治癒痕がみられた。

その他、キツネもしくはタヌキに由来するみられる肋骨 1 点と種同定に至らなかった哺乳類の骨が 14 点採集されている。うち 11 点は中型のイヌ科動物に由来すると思われる肋骨であり、いずれも完形を保っていた。なお余す 3 点のうち 2 点はシカもしくはイノシシの肋骨の可能性が高い。

3. 考察

それでは、上記の脊椎動物遺体群の内容から、往時間口 A 洞窟を利用した人々の如何なる活動や行為を読み解くことができるだろうか。岩礁域に生息するベラ科と初夏に黒潮に沿って三浦半島の沖合を通過するカツオの遺体が認められたことは、弥生時代から中世にかけて当洞窟に沿岸及び沖合双方の漁撈活動の漁果が持ち込まれていたことを窺わせる。春から夏にかけて沖合から湾内へと回遊するマダイ・スズキに体長 30cm 未満の未成魚の資料が認められなかった点も興味深い。もとより目視により回収された資料であるため、サンプリングバイアスが生じている可能性を考慮しなければならないが、

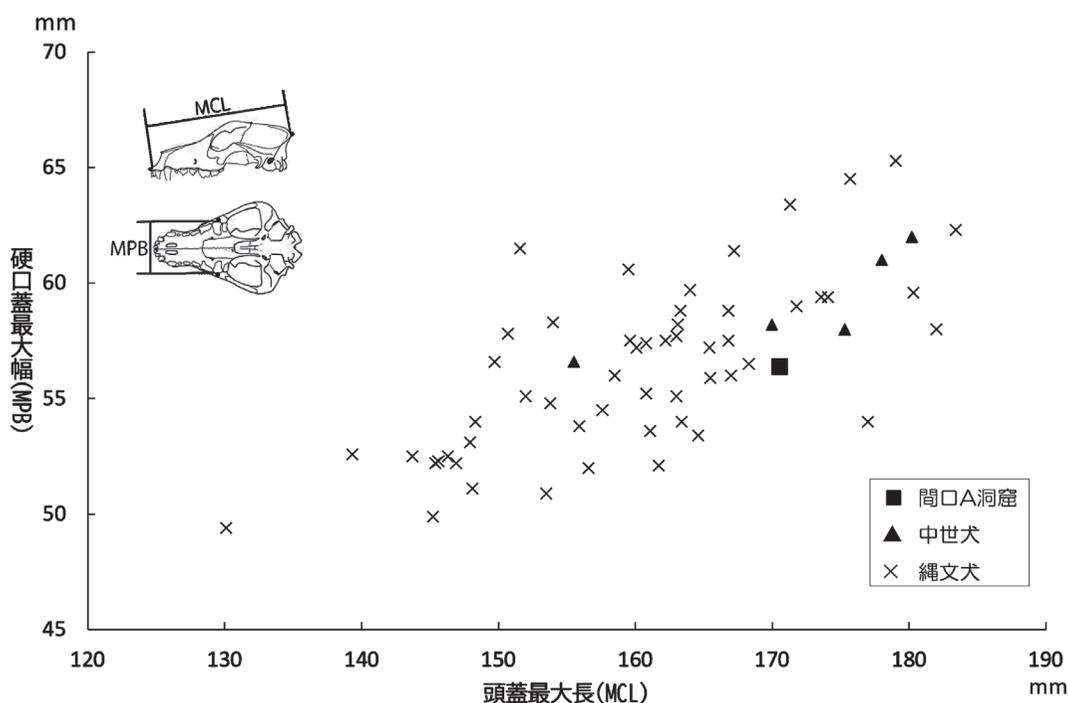


図2 頭蓋計測値の比較

縄文犬及び中世犬計測値の出典はそれぞれ Komiya et al 2015、茂原 1986 に拠る

元来未成魚の遺体が洞窟内に残されていなかったとすれば、弥生時代から中世にかけて当洞窟内に持ち込まれていたのは沿岸および沖合で得られた漁獲物のみであったと見てよからう。

鳥類遺体については、当洞窟の利用季節も示唆してくれる。アビ属、ウ属とも三浦半島には主に冬に飛来する海鳥であることから、それらの遺体が確認されたことは該期における洞窟の利用が冬季に及んでいたことも窺わせる。

哺乳類については、イヌに幼犬、成犬双方に由来する遺体を確認できた点が注目に値する。赤星(1953)の調査報告によると、これらの犬骨は洞窟の上層(鎌倉期)中央右寄りの部分にまとまって出土したという。そこで図2には、小稿報告の成犬頭蓋骨の最大長と硬口蓋最大幅を、鎌倉市材木座遺跡から出土した中世犬と既報縄文犬の計測値と比較してみた。その結果、件の頭蓋骨の計測値は、既報の縄文犬・中世犬双方のレンジに収まることを確認した。未成熟であるため形質的特徴を云々することこそできないが、生後4ヶ月前後とみられる幼犬の遺体がほぼ一体分纏まって出土したことも注目に値する。赤星(1953)の報告に解剖学的位置を保って出土した様子こそ記されていないが、下顎骨・四肢・体幹骨がいずれも完形を保ち、それらに齧歯類のトゥースマークも認められなかった点にも鑑みれば、死後、さして時間を置くことなく土中に埋まった遺体、ひ

いては埋葬個体に由来する可能性も考慮すべきかもしれない。

野生陸獣の遺体は各分類群とも僅かな資料しか得られなかったが、特にシカについて鹿角片が一点も採集されていない点が興味深い。なぜなら、筆者らが別途その内容を精査した神奈川県立歴史博物館所蔵の間口 A 洞窟出土遺体群の中には、角器の原材も含め少なからぬ量の鹿角片が認められたからである(佐藤ほか 2022)。同じ洞窟から採集された動物遺体にかかる相違が見られる点からは、洞内で行われた活動・内容に地点差や時間差があったことを読み取るべきかもしれない。

4. むすび

はじめにも述べた通り、間口 A 洞窟は三浦半島に数ある洞窟遺跡の中にあって、国内初例となるト骨やト甲が出土したことで学史的にも重要な遺跡に他ならない。しかしながら、弥生時代から中世にかけての洞窟の性格については、なお検討の余地がある。それだけに、過去の調査において当洞窟から出土した動物遺体の総体を把握する意義は大きい。幸いにして筆者らは既に他の三館に分散・収蔵されている資料の悉皆調査を実施することができた。近い将来、他三館が所蔵する資料も含め間口 A 洞窟から発掘された動物遺体の全容を明らかにした暁には、往時の当洞窟の性格や、洞窟利用者の活動・行為に更なる理解を深められるものと確信する。また、小稿で報告した成犬の頭蓋骨については、横須賀市自然・人文博物館の許諾を得て、aDNA の解析と安定同位体分析、放射性炭素年代の測定にも着手している。いずれその成果も報告することも申し添え、小稿を擲筆する。

謝辞

館蔵資料の精査をご快諾くださり、本小稿の執筆機会も与えてくださった横須賀市自然・人文博物館の瀬川渉氏に厚く御礼申し上げます。また人骨の同定・観察に際しては、慶應義塾大学文学部の河野礼子教授のご教示を得ました。末文ながら記して感謝申し上げます。

引用文献

〈邦文〉

赤星直忠 1953「海蝕洞窟 三浦半島に於ける弥生式遺跡」『神奈川県文化財調査報告書』

20:52-143. 神奈川県教育委員会

神澤勇一 1973「間口洞窟遺跡 本文編」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』7: 1-35.

佐宗亜衣子 2022「海蝕洞穴遺跡のケーススタディ」『特別展 洞窟遺跡を掘る 海蝕洞窟

の考古学』神奈川県立歴史博物館, pp. 116-119.

佐藤孝雄, 宇根宏紀, 艾凱玲, 千葉毅 2022 三浦市間口洞窟遺跡の脊椎動物遺体. 日本動物考古学会第9回大会(豊橋市自然史博物館),ポスター発表, 日本動物考古学会

茂原信生 1986 「東京大学総合資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ」『東京大学総合研究資料館標本資料報告』13: 1-114.

堤俊夫, 川島卓, 浜田勘太 1982「三浦市大浦山海蝕洞穴より出土した魚骨の種属判定と体長の推定」『京急油壺マリンパーク水族館年報(隔年号)』11: 69-76.

森忠男 1930 「本邦産雑種犬ニ於ケル齒牙携帶及ビ其ノ二代齒列發生ノ時期ニ就テ」『日本歯科学会雑誌』23: 227-256.

山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿兒島大學農學部學術報告』7: 125-131.

〈英文〉

Driesch, A.V.D. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Harvard University.

Komiya, H., Sawada, J., Saeki, F. and Sato, T. 2015 Morphological characteristics of buried dog remains excavated from the Kamikuroiwa Rock Shelter site, Ehime Prefecture, Japan. *Anthropological Science*, 132(2): 73-85. Doi: 10.1537/ase.150630.



図3 魚類遺体

1.マダイ右前上顎骨(-29), 2.マダイ左角骨(-30), 3.マダイ右主上顎骨(-27), 4.マダイ上後頭骨(-127), 5.スズキ左歯骨(-194), 6.ベラ科下咽頭歯(No45), 7.カツオ左主鰓蓋骨(-40)



図4 鳥類遺体

1. アビ属右足根中足骨(-66), 2.ウ属右橈骨(-201), 3.ウ属右尺骨(-200), 4.ウ属右足根中足骨(-60)

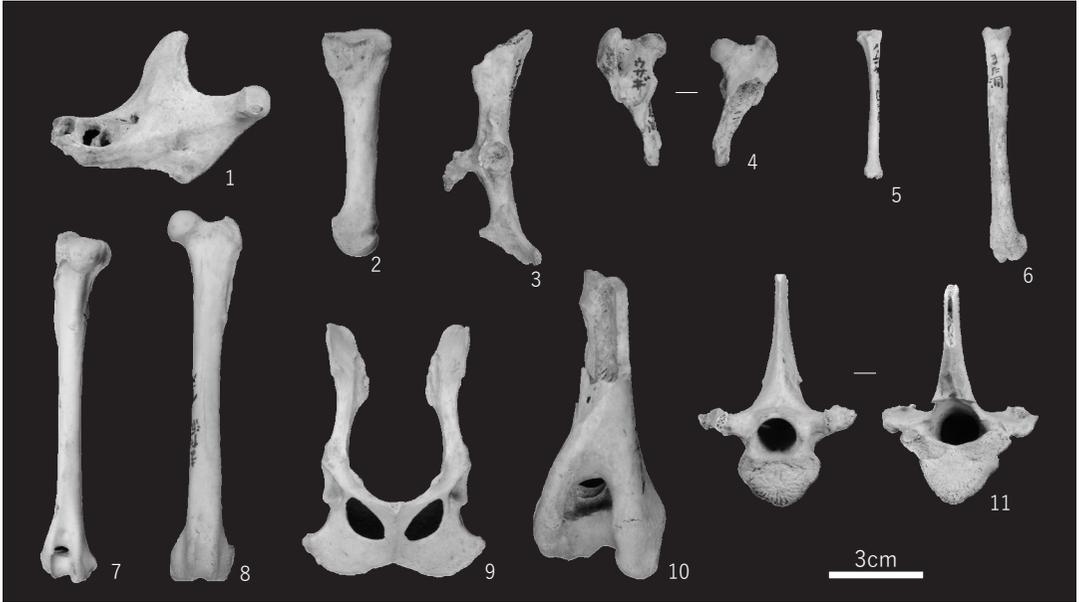


図5 イヌ以外の哺乳類遺体

1. ヒト左下顎骨(No30), 2. ヒト右第3中足骨(No31), 3. ノウサギ左寛骨(-108), 4. ノウサギ左大腿骨(-107), 5. イタチ右脛骨(-111), 6. タヌキ左橈骨(-144), 7. キツネ左上腕骨(No27), 8. キツネ左大腿骨(-146), 9. キツネ寛骨(No94), 10. イノシシ左上腕骨(-141), 11. シカ胸椎(No29)

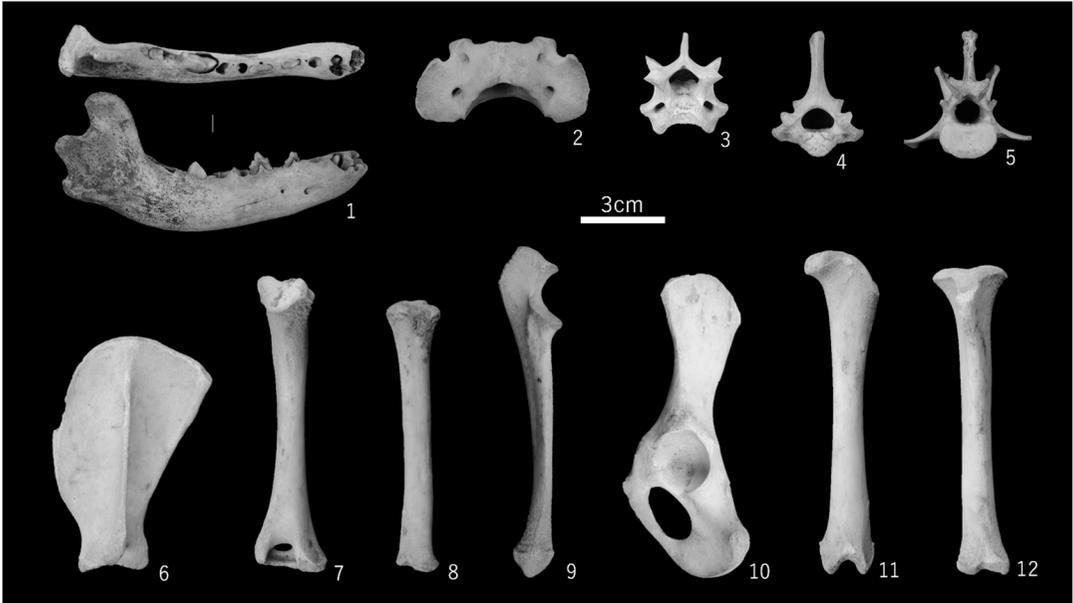


図6 幼犬遺体

1. イヌ右下顎骨(No2), 2. イヌ環椎(-143), 3. イヌ頸椎(No16), 4. イヌ胸椎(No18), 5. イヌ腰椎(No21), 6. イヌ左肩甲骨(No3), 7. イヌ左上腕骨(No5), 8. イヌ左橈骨(No7), 9. イヌ左尺骨(No9), 10. イヌ左寛骨(No10), 11. イヌ左大腿骨(No12), 12. イヌ右脛骨(No11)

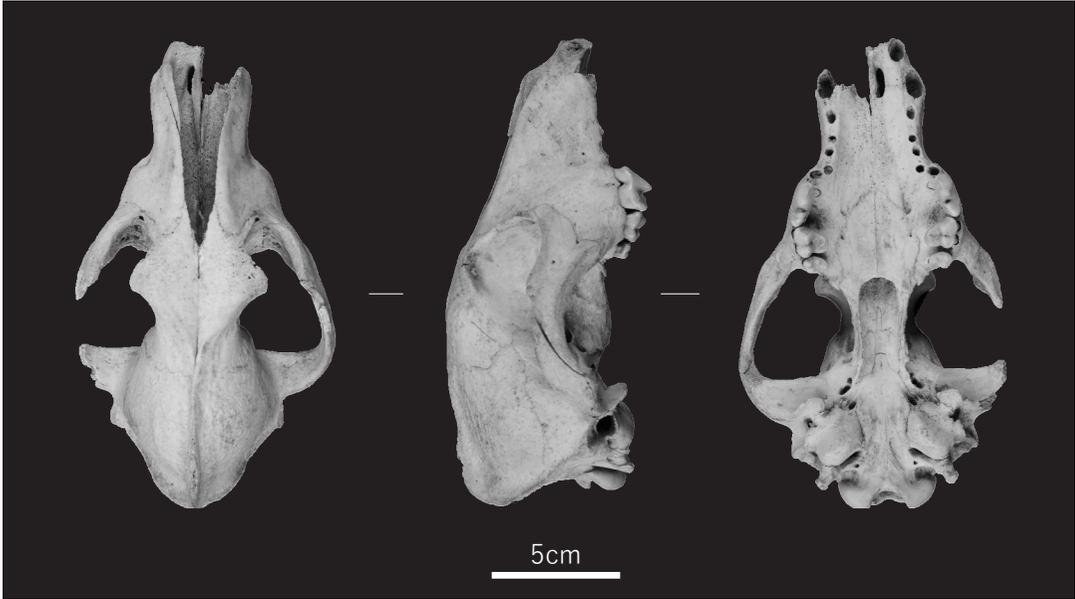


图 7 成犬頭蓋骨 (No1)